

語り継ぐ、明日へ。



歴史はいつも未来へのみちしるべです
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが
少し合わなくなってきたなと感じ始めたら
いつか来た道まで戻ってみましょう

ひと街ごと No.30

雪の中の熱気。

冬の伝統行事として知られているのは秋田県のかまくら。雪深い地域にはどこにでもある遊びです。簡単なものなら家の傍で、屋根から落ちた雪を踏み固めて二人二人が入れる横穴形式に。次はレベルを上げて、かまど状に積み上げた雪の上に板やむしろを渡して雪をドーム型にかぶせます。こちらは掘る苦勞がありません。本格的なのは雪を小高く積み上げて、中をくりぬいていきます。中は意外と暖かく、おしゃべりやゲームに時のたつのを忘れました。雪まみれになりながら、崩れてこないようにしっかりと塗り固めていく知恵も、いつしか身につきましたね。

- ・時の街角／旧小樽新聞社 — 2
- ・マチの博物館／東京屋 — 3
- ・あるはむレトロポリス／札幌市電 — 4
- ・川筋を行く／豊平川 — 5
- ・来た道行く道／若林肖像画房 — 6
- ・道具で道草30年 — 7
- ・時計のある風景 — 8

二〇一〇年冬(年四回発行)

発行：(社)印刷紙工

札幌市中央区南十五条西十八丁目
TEL(011)561-1597

編集：ひと街ごと刊行会

札幌市中央区北一条西十七丁目 北海道不動産協会館四階
(編)編集工房海内 TEL(011)633-1651

時の街角

北海道開拓の村から

石造建築といえは全国どこにでもありそうですが、実は札幌や小樽に多い、珍しい構造なのです。それは加工しやすい札幌軟石を産出するゆえ、高くそびえる直方体の新聞社社屋ながら、独特の温かみも伝わってくるのが特徴です。

言論の府の威厳と 札幌軟石の温かみ。

旧小樽新聞社

明治四十二年（一九〇九）建築

まず北海道の新聞の歴史からたどりますと、初めて発行されたのは明治十一年（一八七八）の「函館新聞」です。続いて「札幌新聞」が同十三年。小樽では同二十四年の「北門新

報」が初めて、創刊後すぐに札幌に移転しています。

小樽、新聞とくれば石川啄木を連想する人もいるでしょう。明治四十年、札幌に来た啄木が職を得るのがこの北門新報ですが、ここは十日間で辞め、小樽で「小樽日報」の創刊に参加しています。

「小樽新聞」はそれより先の明治二十七年。前年に札幌で創刊された雑誌「北海民燈」が小樽に移転して発行形態を変えたものです。小樽の商況などを伝えながら東京、旭川に支局を開設し、「北海タイムス」（札幌）、「函館毎日新聞」とともに、北海道の三大新聞といわれていました。その隆盛の中で火災による社屋全

焼、新工場の建設などを経て、明治四十二年（一九〇九）九月に市内堺町に完成した木骨石造三階建ての新社屋がこの建物です。

木骨石造とは、柱や梁などの木の骨組みの外側にかすがいで石を張り付けたもので、小樽運河沿いの倉庫



などにも見られます。石は札幌の石山で切り出された厚さ約一八センチの軟石が使われています。

札幌軟石の特徴はなんといっても加工しやすいこと。正面壁を四等分する柱を模した突出部、玄関のギリシャ建築に見られるふくらみ、軒周りの歯型の装飾、屋上部の半円アーチ、北極星の社章など、たくさんの工夫が見られます。

また上げ下げ窓、防火防犯のための鉄の扉は報道機関としての威厳を表してもいいでしょう。内部の壁や天井の漆喰仕上げ、浮き彫り装飾なども見るべきものがあります。



長らく民間会社の所有となっていたこの建物がクローズアップされたのは昭和四十九年。都市計画道路臨港線建設（小樽運河埋め立て）のためでした。北海道開拓の村への移転はこの五年後のことです。

外観同様に内部もシンプルな構造
かつての活版印刷機械や
無数の活字が展示されている



札幌軟石の加工のしやすさを生かして
外観に施された多様なデザイン
屋上部の社章は北極星に風のように見える
※参考文献「北海道開拓の村開村10周年記念誌」

子供の遊びの歴史を述べて一冊の分厚い本がありますが
終戦後から高度成長にかけての遊びなら
瞳を輝かせて我こそはと語りだす人の多いこと――
ここへ来ればそれらの「生き証人」ならぬ「現物」があります

駄菓子ひとつで よみがえる「あの時代」――。



十二月初旬。話をお聞きしている代表
取締役の河野元幸さん(五)が、しばしば
レジに立たなければならぬほどのお客
さんの入り。多くの人が「領収証くださ
い」とは、会社の忘年会やクリスマスを
前にしての幹事役の人たちのようです。

でも河野さんいわく「六月から九月に
かけてはこんな忙しさではありません。
もう身動き取れないほどにお客さんでぎ
つしり埋まるそうです。夏祭りから秋祭
りへ、それは北海道のイベントが最も集
中する季節でもあります。

先代の創業は昭和十一年(一九三六)。

中央区南二条東二丁目の二条市場近く

でした。二代目社長の元幸さんは生れ
たときから駄菓子や玩具に囲まれて育
ち、同五十二年頃から店を手伝い始めま
した。現在地へ移転したのは平成二年
(一九九〇)のこと。

時代の流れとともに子供たちの遊び方
が変わっていく中で、店に出入りする露



足元から天井近くまで積み上げられた商品の数々。あつ、これ知ってる!!なんて、いっ声もあつて、

夏場は会社や地域のイベントで「縁日」の賑わい

天商の人たちの話も、いつしか毎年のよ
うに減っていく売り上げのことばかり。
河野さんには「これは単に景気のせいだ
けではないな」という先行きへの不安感
が募りまし



二代目社長の河野元幸さん
半でしてしようか(河野さん)。
卸問屋ですからばら売りはしていませ
んが、単価は安いものばかり。セツトで
買ってもイベント用に数が多すぎるこ
とはありません。大きく分けて「駄菓子」
「くじ引き」「景品」そして「縁日関係」
というジャンルの中から趣向に合わせて
まさにより取り見取りです。
天井近くまで積み上げられている商品
は数万点。見て回るだけで大変ですが、
朝九時の開店から来て午後二時、三時

た。ところ
がこの頃か
ら舞い込ん
でくるのが
学校のバザ
ーや地域の
祭り、イベ
ントでの需
要。「昭和
五十年代後

まで粘っていくお客さんもいるそ
うです。また会社のイベントでこ
ちらの存在を知って、今度は個人
的な使い道で来る人や、子供の時には高
価で買えなかったものを求めに來たり。

変わったところでは、新車の展示販売
会や新築マンションのモデルルームで、
子供たちが飽きないようにと買い揃える
業者たち。レストランではお子様ランチ
の景品です。

「まだまだ面白い使い方があられるかもし
れません」と、河野さんは駄菓子・玩具
の可能性に期待を寄せています。





雪の中を電車を待つ人たち(西4丁目。昭和三十九年一月)

雪の降る日の市電も風情がある
(札幌観光協会提供)



あるばお レトロポリス

札幌市電

CO₂を排出せず、ゆつくりとしたスピードで環境の世紀にふさわしい乗り物という大げさかでも全国各地で保存の動きが盛り上がりつつあるのはこのゴットンゴットンを愛する人の多さを物語っています

時代が求める「ゆつくり」 近い日に都心部の主役に。

かつては全国六十五都市で走っていたという路面電車。今では十七都市でしか動いていません。ここま

減った最大の原因は、昭和四十年代のモーターゼーションの発達です。「健在」とはいえ廃止路線も多い札幌市電の思い出を語り始めれば尽きないでしょう。覚えていた路線や電停でその人の年齢がわかるというものです。

すでに廃止された路線をざっと挙げていきますと

- ・豊平線(すすきの—豊平8丁目)
- ・苗穂線(道庁前—苗穂駅前)
- ・北5条線(札幌駅前—西高前)
- ・西20丁目線(西高前—西高)
- ・中島線(松竹座前—中島公園)
- ・桑園線(桑園駅前—桑園駅通)

前—長生園前)

・鉄北線(新琴似駅前—北5西5)の八路線です。この中で松竹座というのはすすきのにあった映画館のこと、札幌西高はかつて北三条西十九丁目にありました。

このうち中島線が昭和二十三年、桑園線が昭和三十三年に廃止されたほかはすべて地下鉄開通に伴う

三十五年に廃止されたほかはすべて地下鉄開通に伴う

昭和四十六年以降の廃止です。路線は消えても市電の愛好者は多く、吹雪のさなか雪を蹴散らしながら走るササラ電車に出会ったりすると「おつ、がんばってるな」とつい応援したくなります。

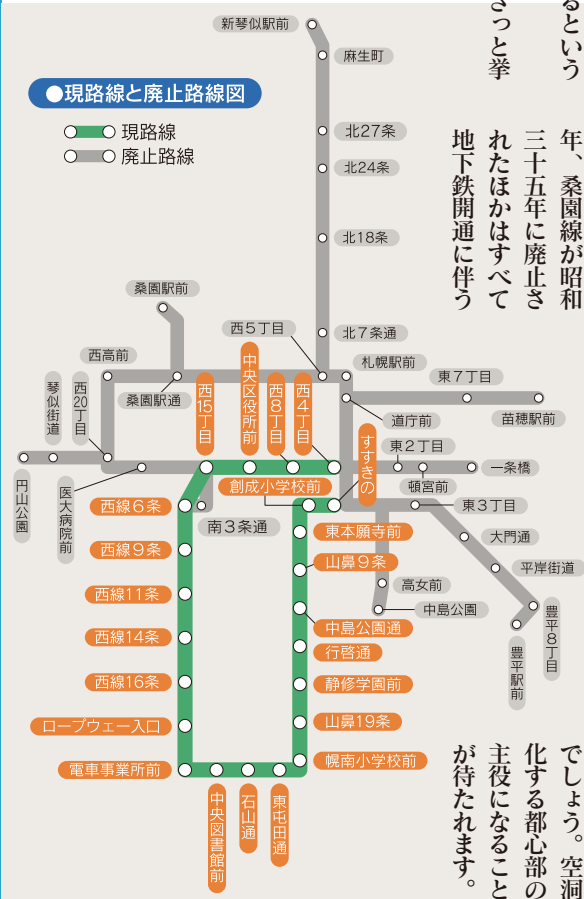
環境の時代にふさわしくもっと多くの人が乗ってもらうには、電停と軌道の段差をなくして、お年寄りや車椅子が楽に乗降できるようにしたり、路線を延ばしてどこからでも乗れるようにしたりという工夫も必要でしょう。空洞化する都心部の主役になることが待たれます。



右…冬が本番のササラ電車(昭和五十八年十一月)
左…雪で立ち往生する市電(平成七年十月)



※写真左上三枚は札幌市写真ライブラリー提供 ※参考文献「市電70年のあゆみ」札幌市交通局、路線図も



今は車体もいく分スマートになって

豊平川

橋の物語

役割大きい交通の動脈に
思い出のシーンはいくつ。

人と川の親密度は河川敷の利用でわかる
前回はこのようなこと中心に書きました
もう一つあるのではないかとというのが今回
それは「橋」です
豊平川の場合はどうでしょうか



市電も走っていた旧豊平橋(昭和28年)
(札幌市写真ライブラリー提供)

世界中にある数知れない橋。それは人々の様々な思いや歴史が交錯する場所でもありま

す。中でも都心部にある橋には、行き交う人の数だけモニユメンタルなシーンが詰まっているといってもよいでしょう。
例えば詩人と画家の出会いと別

川筋を行く

人と川の様々な
かわわりを
たずねて

までで
しょうか。

このうち名橋といわれた時代も含めて最も市民に親しまれているのは豊平橋です。明治四年(一八七二)に架けられた丸木橋に始まって、洪水の度に架け替えられること数十度。大正十三年(一九二四)に完成したのが旧豊平橋。現在の橋は昭和四十一年(一九六六)に架けられたものです(小紙二二号)。この旧豊平橋への賛辞はともかく、札幌文庫8「札幌の橋」にも懐かしむ声が寄せられています。しかし豊平川その他の橋にはそ

れ、ミ
ラボー橋。
誰でも一度は経
験のある、川面に時の
流れを見ながらたずねる無
名な橋。たもとに母が迎え
てくれた通学路の橋。

さて豊平川の橋にはどんなシーンがよみがえつてきますか。

図のように豊平川には現在、上流から下流まで大小三十九の橋がかかっています。都心部といえはミュンヘン大橋から東橋くらい



五輪大橋のたもと、「花東」の像

豊平川にかかる橋

※札幌市建設局土木部HP参考



橋の上にちょっとした広場もある幌平橋
交通動脈としての歴史も古い

て架けたのが始まり。その他の橋も人口の膨張、交通量の増加に伴って架けられてきたものが多く見

れほどの思い出は載っておらず、むしろ川向の地域と都心部を結ぶ交通動脈としての役割のほうが大きいようです。
例えば幌平橋は、豊平川下流には豊平橋、一条大橋、東橋しかなかった昭和二年(一九二七)に、河合才一郎という人が札幌と豊平を結ぶ橋として、私財を投げ打つ

斜張橋のミュンヘン大橋



受けられます。

翻つていえば、それだけに人の物語の生まれる要素は少ないということにもなるでしょう。もう少し中心部の、石山通りあたりを豊平川が流れていたなら、釧路市の幣舞橋のような風情のある橋がいくつも誕生していたかもしれません。余談ですが、北九州市小倉北区を流れる紫川の、市街地中心部の橋には、海の橋、火の橋、水鳥の橋、太陽の橋、風の橋などの愛称のついた十橋があり、リバー・ウォークとして市民や観光客の憩いの場になっています。

北海道ゆえのスケールといえはそれまでですが、橋にもう少し親しみをというのが現状でしょうか。



造形と色彩があざやかな水穂大橋
苗穂と菊水を結ぶ

来た道、行く道。

様々な先達がいるからこそ
二十一世紀があるんだよ——
スローコミュニケーションを求めて。

本欄への自薦、他薦を
お待ちしております。

役場や団体事務所の応接室などで見かける歴代トップの肖像画。歴史の重みが感じられてつい見入ってしまいます。

その肖像画を描くことを生涯の仕事とした画家の二代目は眼鏡屋さんです。小樽市の人船十字街から山側へ坂を少し上ったところにある「メガネの若林」、別名「若林肖像画房」。主は若林鳳推さん、七十五歳です。実は鳳推さんの父、若林千峯さん（平成八年、八十八歳で逝去）がすごかった。多くの市町村長の肖像画を手がけて全道に名を馳せ、錦心流の琵琶の演奏者としても有名だったとか。

若林家は新潟県佐渡の出。幼い頃から絵を描くことが好きだった千峯さんは東



父千峯さんが描いた石川啄木

京に出て画を学び、単身、北海道に活躍の場を求めてやって来ました。そして小樽の都通商店街に肖像画房の看板を掲げてから、まだ二歳だった鳳推さんがお母さんに背負われて来道。昭和十一年のことです。

写真の発達していない時代だっただけに千峯さんの仕事は重宝がられ、「外交員三、四人で方々に注文を取りに行つて、十人くらいまとまると父がそこへ出向き、旅館に長逗留して画を描いたもの」（鳳推さん）。千峯さんが出征している間、空き屋同然の画房を短期契約で賃した時計修理業の人と一緒に、サングラスを並べて売り始めたのが今の眼鏡屋の前身です。

その後は千峯さんも戻ってきて「時計は売れても売れなくてもよい商売」（鳳推さん）に。画業を通じて著名な政治家などとの親交も深まり、発展の一途でした。残念なことに画房にも残ってあった作品の数々は、平成十七年八月の火災で焼失。店舗も現在地に移転しました。

鳳推さんが本格的に肖像画を描き始めたのは十五年ほど前から



肖像画の制作に絵筆を振るう若林鳳推さん（若林さん提供）

若林肖像画房（メガネの若林）
小樽市入船4丁目6番4号
TEL (0134) 34-1588



上：石原都知事は鳳推さんと稲穂小同期生裕次郎像と共に習作の一つ
下：高島の高台寺住職像は絹地の軸物
右は鳳推さん（若林さん提供）

注文どおりの「顔」は、先代・千峯を受け継ぐ練達の技法で。

若林鳳推さん——小樽市・若林肖像画房

いますから抵抗なく画業に。店内に掲げてある石原都知事の肖像画は、知事と同期生である稲穂小学校の同期生であること。また描き始めたばかりの頃のもので下手ですが」とは言うものの、同知事も出席した同期会の幹事を務めたときの思い出も詰まっています。



デジタルカメラが普及し、パソコンによる精密な肖像画もある時代に、なぜ手描きの肖像画なのでしょう。まず「若くといえは若く、地味に見えるようにといえはそのように」注文どお

写真一枚あれば、コンテとパステルを使った技法で、子孫に残る肖像画が出来上がりやすい。人生の節目に、あなたもいかがですか。



メガネ店の店内には先代の作品を中心にたくさんの肖像画がある

道具で

道草30年

戦友、同志と呼びあつた友の死ほどつらいものはない
まして世に妥協せず自らの生き方を貫きとおした友であれば
彼が唯一残したメガネを懐に筆者は追悼の旅に出た

坂一敬

夜、本のページをめくっていたら、電話が鳴った。それは私の二十年來の友人が、今少し前に亡くなったという連絡であつた。

一月月程前にお見舞いに行った時は、結構元気で会話もはずみ、とてもこんなに早く亡くなるようには見えなかつただけけれど。聞けば今回体調が悪いというので急遽入院し、意識が混濁し、九時四分に亡くなつたということであつた。

翌日がお通夜。黒い服を着て葬儀場の席に座つた。葬式と言っても大概は義理で一時間そこにいるだけのことが多いのだけれど、今回はまったく違ふ。翌日の告別式も朝から出かけて行き、彼の棺の中に赤い花を入れて私のお別れをした。彼の棺の横に座つて手稲山口の火葬場までの車中で、低い声で「同志は倒れぬ」を口ずさみながら。そう、まさに彼の死は私にとって単なる知り合いの死ではない。同じ

妻子なく、墓なく、 メガネだけ残つた友へ……。

時代を生き、そして、命を燃やして闘つた、身土不二の石澤さんの言葉借りれば、かけがえのない戦友であり、同志の死である。



友の形見となったフレームだけのメガネと10円硬貨

遺体が骨になるまでに一時間五分分かかると言われたので、その間、ロビーでコーヒを飲みながら彼のことを思い出していた。窓の外には手稲の山並みが続き、申し分のないロケーションである。

東京からこつちへ戻つてきてすぐ、もとマル戦の友が私を引っ張つて行つたコンピュター関係の事務所には彼はいた。兄貴と、名前の前にバをつけてバ加奈子と呼ばれていた三人で。

兄貴の名前はよく知つていた。別の小学校時代、その頃モーターを作つたりラジオを作つたりすることがはやつていた。私もその中にいて作つたものを、学校の展示に出していたのだけれど、こいつは自分より一段上だと認めざるを得ない作品を出していたのが私と同年の彼の兄で、その二つ下の弟が彼であつた。

故郷も学校も同じだから話に花が咲き、あつという間に親しくなり、その彼が、コーヒを飲みに行こうといつて私を連れていったのが「ひらひら」という喫茶店。

そのマスターが言うには、昼は自分、でも夜やってくれるメンバーが足りなくて困っている。彼が私の背中をどんと押す。「坂さん、やりな」。かくして私は店に客として行つたその日に、カウンターの内側に入るこゝろになってしまった。水商売の経験どころか、コーヒを落と

したこともないのに、数時間の特訓だけで。

次の日から、終業のベルが鳴ると同時に会社を出て「ひらひら」に。そして、前掛け姿でコーヒをお客に出していた。今ならもう絶対にできないけれど、当時は私も四十を少し出たばかりだったから。そして何よりも彼のオルグが並でなかつたから。彼とはそれから二十五年の付き合いになる。

彼の生き方は……？

ずっと後、彼の恋人だった「オマン」に会つたことがある。彼女は女の子が一人いて、旦那は大学の教授だとか。

「坂さん、マコ、今どうしているの？」

私はオマンに今の彼のことを言う。オマン「あー、あいつまだバカやつているんだ！」

私の話を聞く彼女の目は、「マコ」と手をつないでいた頃のオマンの目になっていた。でも、そこにはもう、彼女も私も戻れはしない。

彼の後半生は、オマンの言うバカを続けとおした人生であつた。うらやましくもある。

取骨の後、入れ歯とメガネは溶け



在りし日の友と——右が筆者

ても型は残つた。私が貰うことにした。

ある日、彼のメガネを懐に、私は汽車に乗つた。

彼が見たいと言つていた海を見せるために（二人とも土別という海のないところで生まれたから）。行き先、今夜の宿、そんなものは決めていない。また決める気もない。バカを通した彼を弔う旅だもの。行き当たりばつたりこそふさわしい。元、北大全共闘、丸山充、享年六十三歳。

土別きつての秀才と言われるも、東洋大、北大、共に中退、妻、子持たず、残せし金銭なく、また遺書もなし。おそろくは墓も……。一人死す 友の遺品を懐に 枯れ葉舞い 落ち葉踏む旅を行く こよいの宿はいずこ ここは北国 冬はそこまで

メルヘンの冬、 蒸気いよいよ白く。

何かに追い立てられるように過ぎていく毎日。いつもそこにある時計に、足を止めることを忘れていませんか。

時として氷の微粒が降ってくることもあるけれどそれもまた楽し——小樽市入船のメルヘン交差点の小樽オルゴール堂前で、十五分ごとに水煙を吹き上げて時刻を告げている蒸気時計。気温が氷点下に下がる冬こそ真価、煙はその白さを濃くしています。

地域のまちづくりグループが平成六年、カナダ・バンクーバー市のガスタウンにある時計と同型のを輸入し、ここに設置しました。街も店舗も、そして時計も、アンティークで決まっています。周辺の施設も含めて第七回小樽市都市景観賞を受賞。

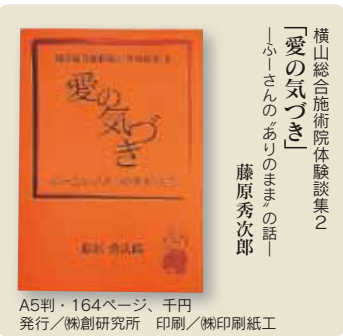


Now Printing

●本づくりのパートナー
(社)印刷紙工

居間で本づくりセミナーを
自分史など本をつくりたいと考えている人のために、出前の本づくりセミナーを承ります。三人以上のお集まりで会場をご用意いただけます。日時をご相談の上、印刷担当者や編集者がお伺いいたします。ご自宅の居間でも結構です。もちろん無料です。
記念誌は未来への道しるべ
企業や団体の十年を一区切りとする創立周年、二十周年、三十周年と歴史を重ねていく度にその歩

本 つくってみませんか
句集・歌集・詩集・小説・随筆集・自伝・体験記・回想集・画集・写真集



出版界には多くの「前世もの」が回っていますが、興味のない人にはまったく手が伸びないものもあります。この本も実はその前世を扱ったもの。しかし他の本と異なるのは、

表紙にもあるとおり横山総合施術院の患者の体験談ということです。

埼玉県熊谷市にある同院は、足腰の痛みや循環器、消化器の病、あるいは心の病気などを、対症療法ではなく根本の原因を探ることで治癒を目指している病院です（HPより）。その治療の過程で、前世の自分と出会うことで体の具合が良くなり、まったく新しい人生が開けたという人たちの話なのです。

著者の藤原秀次郎氏も患者の一人で、同院との出会いで人生が変わったということから、それぞれの話の主にもインタビューを行って、読みやすい内容になっています。

前世はドイツやイタリア、デンマークにいたとか、日本の古代という人など、ちょっとユニークだけど心がふんわりする話ばかりです。

みを記録しておかなければ資料が散逸、功績のあった人も物故していきまます。未来への道しるべ、歴史はきちんとまとめておきたいものです。企画、編集、印刷、どの段階からでもご用命を承っております。

小紙を無料で差し上げています

慌しい時の流れに、ほっと一息つける話題を提供していきたいと願っている小紙。ご希望の方には無料で定期的にお送りしております。印刷紙工までお申し込みください。